

# 北海道の渡り鳥

正 富 宏 之

## はじめに

「この国（英国）のあちらこちらからの報告によりまして十分証明されることですが、ツバメの類の少なくとも大部分は、冬には、私どもの所を去らないで、昆虫やコウモリのように引籠つて冬眠状態にはいり、冬の寒い間は眠り過ごし、太陽や暖かい陽気が廻りかえつて、はじめて眠りをさますのではあるまいかとの貴下の御意見は、正しいと思います」（山内義雄訳）。

十八世紀後半、村の副牧師だったギルバート・ホワイトは、有名なセルボーンの博物誌でこう書いた。

もちろん、ツバメ類もアマツバメ類も英国では越冬しない。ただ、彼の名誉のためつけ加えるなら、彼はツバメの渡りの可能性を述べているし、「博物誌」がこうした誤りに満ちているわけでもない。この書簡集は、文学としての価値と共に、科学書として評価される部分も多い。ツバメの話は、不幸な誤譯のひとつだが、見方をかえていえば、人間の自然解明の過程を示す貴重な記録ともいえる。

さてホワイトの例を引いたのは、渡り鳥というのは一筋縄ではいかぬ代物で、北海道のそれについては、ホワイトの観察と五十歩百歩の状態にあるからである。

鳥はなぜ渡るのか、渡りの習性がいつ始まり、どんな方法で渡りの道を見つめるかなど、興味ある問題は他書にゆずり、ここでは北海道の渡り鳥の様子を少しとりあげておきたい。

## 渡り鳥とは

まず、渡り鳥とはどんな鳥のことだろう。それは、一応、繁殖地と非繁殖地のあいだを、定まった季節に

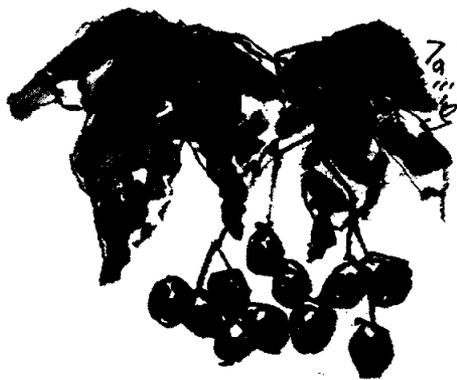
周期的に移動する鳥、ということになっている（注1）。とすると、当然、渡らない鳥もいるわけで、こちらは留鳥といわれる。

たとえば、冬の使者のオオハクチョウは、極東ではサハリン以北の繁殖地と、日本・朝鮮半島・中国などの越冬地を往復する渡り鳥だし、家のまわりのスズメやカラスは留鳥とされる。

しかし、個々の種や個体群、さらに一羽ずつの具体的な生活や移動の様子をみると、右の定義がすべてにきっちり当てはまるものでもないし、渡る、渡らないの区別もばやけてくる。

まず問題のひとつは、定義にある二つの地域の距離である。渡り鳥といえば、遠路はるばる……というニュアンスをもつが、どれだけ長さの移動をすれば「渡り」と認定するか、定めはない。

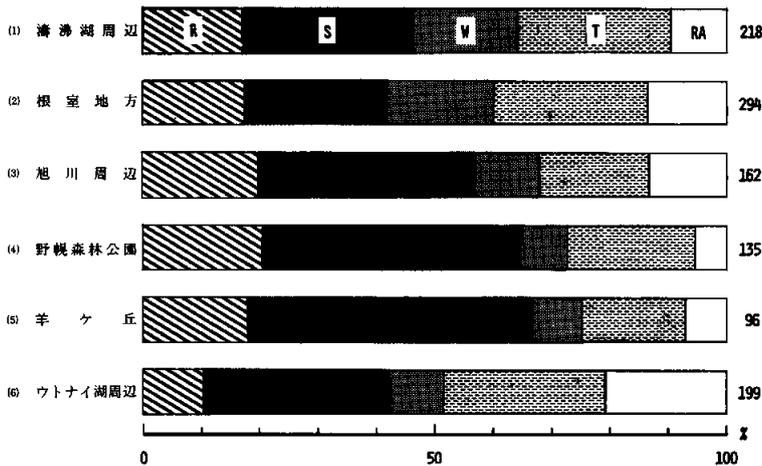
頭に黒い頭布をかぶったようなスズメ大のオオジュリンは、春、北海道に現われ、各地の草原で巣をかまえ、冬、海峡ひとつ越えた本州などへ移る。他方、黄色の胸を張って鳴く近縁のシマアオジは、ところによってはオオジュリンと入りまじって繁殖するが、冬は本州へ立寄り、中国南部や東南アジアで群れをなすという。



第1図 移動性区分による鳥相の構成割合

いくつかの地域において、通年の観察により記録された鳥を移動性の点で区分し、それぞれの種数の割合を示す。R：留鳥、S：夏鳥、W：冬鳥、T：旅鳥、RA：迷・希少鳥。右端の数字は記録種総数。

- (1) 城殿 博 1979 野鳥だより No.35
- (2) 高田 勝・黒沢信道・三浦二郎 1981 根室自然教育研究会誌別冊
- (3) 山田良造 1978 野鳥だより No.33
- (4) 柳沢信雄 1980 " No.40
- (5) 四十万谷吉郎 1977 " No.25
- (6) 佐藤辰夫 1980 " No.41



さらに、同じ草原の空で、にぎやかな羽音と共に急降下を繰返す、アイヌ名「チビヤク」ことオオジシギは、七・八千キロも南下して、ニューギニアやオーストラリアで冬を過す。

ひとつの草原で暮らす鳥も、渡って行く(来る)先や移動の距離は必ずいぶん遠いながら、等しく渡り鳥と呼ばれる。では、もっと短い距離の渡りはないだろうか。鳴き声の物真似で探鳥者をまどわすカケスは、低い山の森林などで繁殖し、冬は人里近くへくるのが多いらしい。また、大雪山などが雪をかぶると、ギンザンマシコなどの高山鳥も低

いところへ現われる(垂直移動)。北海道でのこれらの鳥の確かな移動記録はないが、繁殖・非繁殖の二つの時期で、行動圏は重ならない場合もあるだろう。

では、これらを渡り鳥と呼ぶかといえ、そういわずに漂鳥などと称したりする。もちろん、前述の渡り鳥の定義に合う鳥だが、同一地域内の短い移動だといっているので、漂うとされ、渡らない鳥の仲間に入れる人もある(注2)。

ところが、いまふれた同一地域というのをもくせいで、どこまでの範囲をそう呼ぶかは、渡りの距離同様、何もとりきめはない。島とか海、あるいは国という地理的、人為的区画で、なんとなく区切るが、あいまいなことにかわりない。たとえば、北緯七〇度近くで繁殖し、道北のクツチャロ湖を経て本州で越冬するコハクチョウは海を渡るから渡り鳥で、同じところで繁殖し、より遠いインド大陸へ約六千キロ移動するソテグロツルは、海を渡らないから渡り鳥でない、とはいわない。

渡り鳥を語るとき、もうひとつつかいなのは、ヒトは定住性(?)で、見ている地域は動かないという点である。たしかに、ホモ・モーペンスなどといわれ、近年のヒトの移動は目ざましいが、生活の場を季節ごとに周期的に変えられる恵まれたヒトは多くない。とすると、各地域に同じ、移動している鳥に対する見方は異なることになる。

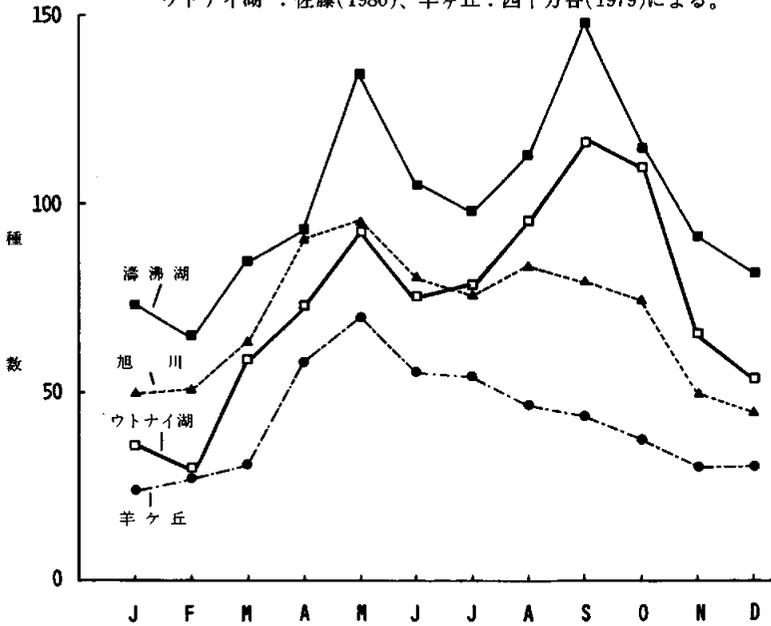
ノゴマ(野駒)という小鳥がいる。スズメより大ぶりで、雄のルビー色ののが美しい。大雪山系の一、八〇メートルの高さから平地の草原まで広く分布するが、北海道には夏しかない。しかし、中国南部やインド、東南アジアの人は、冬しか目にしないし、下北半島以南の日本では、春と秋しか姿をみかけない。そこで地域に応じて、夏鳥、冬鳥、旅鳥という言葉が使われる。

確かに、ノゴマはどの地域の人にとっても渡り鳥である。ところが、はやにえて有名なモズは、冬の北海道ではあまり姿をみない夏鳥だが、日本のほかの地域では、一年中わりと身近かにいる留鳥である。とすると、道産子はモズは渡るといい、内地人は渡らないと思う。

もうひとつ例をあげておこう。タンチョウは、観光名所の阿寒町二十三線には冬だけ現われ、立派な観察センターもその期間しか開館しない。一方、約一三〇キロ東の根室の春国営では、春から秋まで住んで子を育て、冬はいなくなる。だから、阿寒の人には冬鳥、根室の人には夏鳥といわれつきとした渡り鳥だが、道東という地方的な移動だか

第2図 月別の記録種数

種数は濤沸湖：城殿(1979)、旭川：山田(1978)、  
ウトナイ湖：佐藤(1980)、羊ヶ丘：四十万谷(1979)による。



単純ではない  
というこ  
ある。渡り鳥  
とか留鳥とい  
うのは、便宜  
的な用語にす  
ぎない。重要  
なのは、この  
あいまいなレ  
ッテルを張る  
ことに熱心に  
なることでは  
なく、それぞ  
れの種から個  
体までのレベ  
ルで、鳥の生  
活の有りよう  
を時、空間的  
に捉えること  
である。残念

ら漂鳥などという。  
ところが、かつて釧路村の達古武にいたつがいのように、一年中同じ区域内で繁殖・越冬するものもあり、こちらはれっきとした留鳥である。さらに、近年は夏に国後島で繁殖するタンチョウが現われ、おそらく海を渡って釧路と往復しているのであろう。そのうえ、大陸のタンチョウは、ソ連のアムール川流域や中国東北部で繁殖し、朝鮮半島や二千キロ南の中国江蘇省まで移動する渡り鳥だという。これに對比して、日本のは北海道の留鳥であるといつたりする。  
つまり、個体のレベルまで考えると、一枚のレッテルで簡単にすむほど生物の生活は

ながら、北海道の鳥で移動の実情のつかめているのは、ほんのわずかにすぎない。

さらに近年は、便利だがやや混乱をまねく「渡り」の代りに、移動という言葉が使われる。これならば、留鳥の代表のようにいわれるスズメやモズのなかに、実際は本州で数百キロから千キロ以上も移動する個体がいる(注3)のを表わすのに、無理を生じない。しかし、渡りの定義に合う現象を説明するには足りないから、それには回帰移動の語が与えられ、漂鳥も渡り鳥も移動の距離・方向で表わすことになる。

しかし、移動の詳細は種、個体群、個体により異なることが多く、しかも、それには環境の影響が強いのを忘れてはならない。さきほどあげたタンチョウというひとつの種の諸相は、食物やねぐらを含む生息地の環境により生じ、条件しだいで留鳥にも漂鳥にも、渡り鳥にもなる(部分移動)可能性を示している。

### 渡り鳥の種数とその割合

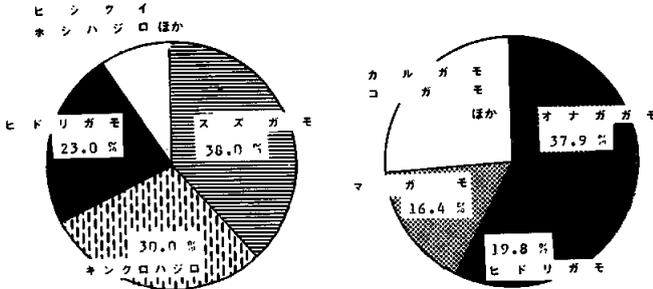
つぎに、少しばかり数字をあげて、北海道の鳥のことを述べておくが、便宜的に「渡り鳥」とか「夏鳥」などの語を使わせていただく。

北海道で記録された鳥は、鳥学会の目録(注4)によると五六科三四四種である(注5)。日本での記載総数が四九〇種だから、ほぼ七〇%にあたる。しかし、一九七八年までの目録補遺では、道内三四六種、日本五〇五種、さらに野鳥の会が収録した一九八二年までの日本の記録数(注6)は五二五種とふえ、おそらく道内でのそれも三六七種を越えていると思われる。

このうち北海道で夏、冬ともみられたのは八一、夏鳥八四、冬鳥六三、旅鳥六九、通常の生活域や渡りルートからはずれたと思われる迷鳥七〇という数になる。ただし、この数字を、あまり素直に(?)は受取らないでいただきたい。つまり、いくつかの注釈が必要で、それしだいで大きく変わる値だからである。

たとえば、総数のなかにはカンムリツシガモやミユビゲラのように、近年は誰もみかけない鳥とか、キジのように移入されたものも含まれる。さらに同種の鳥が夏冬いても、同じ個体あるいは個体群であるとは限らない。また、ほとんどの個体は去るのに、ごくわずかが残る種——ウトナイ湖で越冬する、夏鳥のはずの十数羽のアオサギとか、サロベツ原野で繁殖する、旅鳥のはずのキンクロハジロなど——もある。したがって、

第3図 湧洞湖(左)とウトナイ湖(右)における10月初旬のガン・カモ類優占種の割合。  
北海道(1981)注(7)から画く。



これらをどのカテゴリーに突込むかは、人により異なるだろう。それゆえ、道内それぞれの地域での出現種と、それがどれくらいの数現われ、どれほどが繁殖や居残りをするのか、実態を捉え、そのうえで北海道全体を見渡すのが本筋というものだろう。

最近では各地で、周年その地域の鳥を観察する人もふえ、成果も発表されている。そのいくつかを借用して、記録された鳥を、それぞれの地域での留・夏・冬・旅・迷(希少)鳥の五群に強引に分けて出現割合をみると第一図のようになる。繰返していえば、五群に分ける基準は個人的なものだし、かつ、観察・記録不十分のために分け間違いがでることも十分ありうる。

おもしろいことに、ウトナイを除くと、一年中見られる鳥は、地域で観察された種数のいずれも二割前後にとどまり、実数の最高も五〇種ほどである。もともと、五〇種のなかにカモメ類や海鳥が含まれるから、内陸に住む人は、冬のあいだ普通二〇種程度の鳥にしか出会えない。結局、まれにしか見られない鳥(そのほとんどが渡りをするが)の数を、おおざっぱに約一割とすれば、残り七割が純然たる渡り鳥ということになる。

さらに湧洞(湖)、根室(風連湖)、ウトナイ(湖)のように、観察区域内に湖沼があるところは、夏鳥の割合がやや少なく、そのぶん旅鳥が多い傾向を示す。これは水鳥やシギ・チドリ類のように、水辺を通過する鳥が多く寄るからである。なお湧洞湖や根室周辺と、

ウトナイ湖周辺とで、冬鳥と希少鳥の割合に違いがあるのはなぜだろうか。それは、前者が海岸域を含むのに、ウトナイがやや内陸にあり、越冬海鳥の記録が少ないこと、水辺があるため渉禽類は寄るが、主要ルートでない(?)などが原因かもしれない。

いずれにしても、例にあげたところは、地理的にはもちろん、それぞれの環境も異なり、それに応じた鳥の出現や割合を示すといえる。ついでに月別の出現種数(第二図)をみると、水・渉禽類の飛来地を含む地域では、春秋の種数の増加がいちじるしく、二峰型のグラフを示し、草地が主となるところでは、一峰型となる傾向がある。むしろ内実は、夏鳥の増減に、冬・旅鳥の増減が交錯して、地域に応じた種数の変動が起きる。

また、たとえば同じような環境の海岸湖沼でも、現われる渡り鳥の種類や数、その割合は異なる。よく知られているように、コハクチョウは道北のクッチャロ湖や道央のウトナイ湖に多数現われるが、道東の湖沼ではオオハクチョウにとつかわられ、ごくわずかしみつかからない。

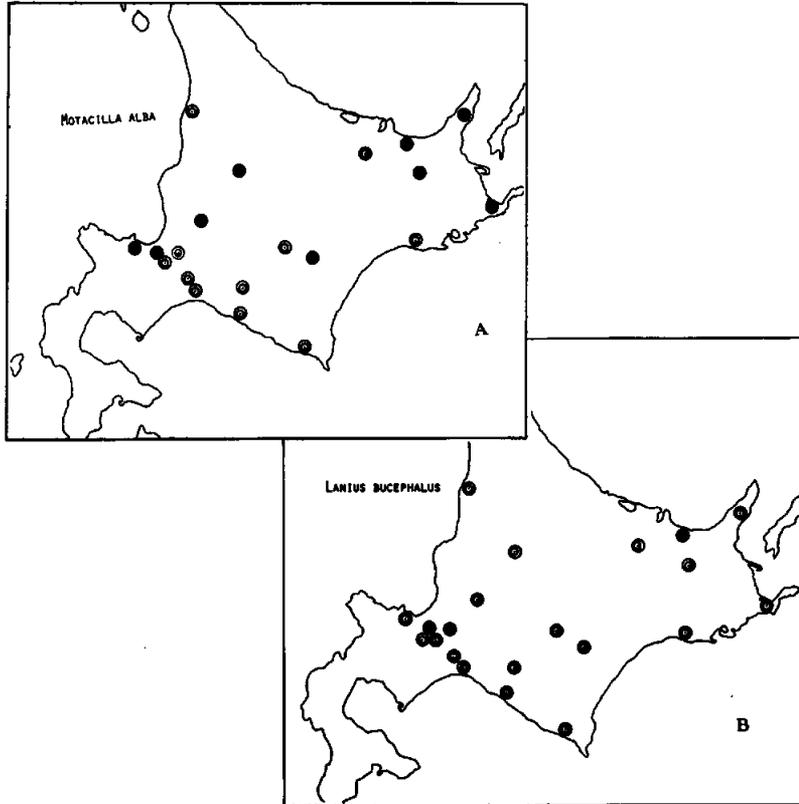
さらに、いくつかの湖沼で十月の同じ日に、同時に調査してみると(注7)、クッチャロ湖や湧洞湖では、スズガモ・キンクロハジロという潜水ガモ(水にもぐって餌をとる)とヒドリガモ(非潜水ガモ。水面に浮いたまま採餌)が混じって優位を占めるのに、湧洞湖やウトナイ湖では非潜水ガモだけで大半を占め、きわだった違いをみる事ができる(第三図)。

### 渡り鳥の羽数

ところで、いったいどれくらいの羽数の渡り鳥が北海道へくるのだろうか。これも一九八〇年十月の調べでは、六つの湖(クッチャロ、湧洞、風連、湧洞、ウトナイ、大沼)で、カイツブリやアイサ類を含むガン・カモ総数一〇二、六九四羽が数えられ、半数近くがヒドリガモであった。当然、それ以外のところにも水鳥はいるから、道内全体ではそれをはるかに上まわるし、広く分散する夏鳥の数にいたっては雲をつかむ話となる。

右の水鳥の数にしても、秋のある一日に道内にいた羽数ではあるが、北海道へ渡ってきた、あるいは通過した数ではない。渡り鳥はひとつの地域にある時間は留まるにしても、多少群れをなし、移動羽数の日変動を示しながら、水の流れのようにつきつきと飛去・飛来すると考えられる。したがって、通過数全体を捉えなければならぬが、北海

第4図 ハクセキレイ(A)とモズ(B)の越冬状況  
 冬期(とくに1月)に観察例のある地点(黒点)とそれのない地点。  
 記録は藤巻(1973、1980)、佐藤(1976、1980)、四十万谷  
 (1977)、百武(1977)、羽田(1977)、鷹田(1977、1981)、  
 広野(1978)、金山・小山(1978)、山田(1978)、城殿(1979)  
 橋本(1979)、新妻(1979)、柳沢(1980)、長井(1981)、高田・黒沢  
 ・三浦(1981)、小山(1982)、中野(1983)による。



道では調査例がまだない。  
 流水量をつかむのが難かければ、留った水を計ればよい。とくに冬鳥にはあるていど有効な方法である。たとえば、繁殖地に散っているタンチョウを数えるのは難かしいが、冬の餌場集まるのを数えれば個体群の大きさはつかめる。しかし、そんな都合のよい鳥は北海道には少ない。なぜなら、積雪や凍結により、鳥の集まれる場所が閉ざされるからである。結局、たとえば関西地方の湖沼にきたカモ類の冬の最大羽数は、その地域への飛来個体群のおおよその大きさを示すが、北海道では春・秋の二峰性を示す個体

数グラフをいくら眺めても総数は見えてこない。  
 これまで述べたように、ある地方での実状ばかりでなく、それぞれの種が全道的にどのように分布し、それが時間とともにどう変るか(初認、終認も含め)を知ること、移動の様相が理解できることもあろう。それには多数の地点での長期観察が必要になる。たとえば、繁殖期の鳥の分布は、大規模な調査(注8)であるといふ明らかになってきたが、冬の鳥のことは不明の点が多い。そこで既存資料から二種だけを抜きだし、夏鳥といわれる鳥の居残りぐあいを示しておこう(第四図)。観察記録をふやし、この試みを多くの種で行なってみるのも価値があろう。

ただ、これらの分析や方法は、なんといつても移動現象の解明を靴の裏から掻く感には抜けない。もつとも直接的には、鳥に標識をつけ、(テレメーター法やバンディング)行くえを追う方法がある。それにより、道内のかんりの地域で留鳥とされるヒヨドリで、跳び越し移動(より北で繁殖したもののほど、より南へ移動)などが明らかになるかもしれない。

本州との比較

さてもう一度、北海道の渡り鳥の割合を示す数字にもどうだろう。これまで挙げた例からみても、それぞれの種や、あるいは北海道全域で考えれば、道内でみられる鳥を移動性の面できちり分けてしまうのは無理である。が、それを承知で、迷鳥とか、記録があつてもごくまれなもの、あるいは移入されたものを除いて、まともな鳥をひろいあげると、ざっとみて二四七種ぐらいかと思われる。

これを、大部分は飛去し、ごく少数残るのは渡る鳥とみなして分類し直すと、夏鳥九六、冬鳥三八、旅鳥六四、留鳥四九となる。レットル張りの基準は人により異なるが、これまでの試算(注9・10)も集録して割合(%)をみると、夏鳥三九・四二、冬鳥一・一五、旅鳥二〇・三〇、留鳥一九・二三ということになる。このあたりの数字が、北海道の普通の渡り鳥の状況を示すといえようか。

ここで渡り鳥についての、本州と北海道の様相を簡単にくらべておこう。

前述の北海道の鳥の移動区分と本州の例(注9)を比較すると、夏鳥は北海道では本州の約一・五倍、逆に冬鳥は本州の約半分しかない。したがって、より北方から移動する鳥が加わって、旅鳥は本州の約二倍、反対に留鳥は本州の約六割ということになる。

また、道内で繁殖する鳥のうち、北海道以北でも繁殖するものは三十種弱といわれ、以南でも繁殖するものにくらべ約半分にすぎない。この点で北海道以南との結びつきは強いとはいえ、渡り鳥の有り様は、本州とはまたかなり違った実態をもつといえよう。

### 渡り鳥への対応

渡り鳥の問題は、必然的に広い地域を包括して考えなければならない。鳥自身も、勝手気ままに移動しているのではなく、かなり限られた「種の生活境界」をもつが、それは人間のもつ行政区や国境と別物である。それゆえ、渡り鳥にはそれらを越えた対応が必要となる。

その対応の第一歩は、鳥が夏・冬とで暮し、どこを通過して往復するかを理解することである。そのための手段として標識付けは欠かせないし、同時に、標識のついた鳥を発見する努力も必要である。

開拓しつくされた石狩平野のなかの、けし粒のように残された数ヘクタールの泥炭地に、前年足輪をつけられた同じシマアオジが、少なくとも数千キロを往復して翌年も戻ってくる。厚岸の沖に浮かぶ小さな大黒島の前年と同じ巢穴に、コシジロウミツバメはちやんと帰ってくる。これらのことも、再発見のための執念があつて初めてわかる神秘である。が、これらの鳥がどこで冬を越したか、誰も確認していない。

それを知るには、国際協力以外に道はない。日・ソ間では、ソ連(赤色)と日本(緑色)でつけた標識により、ハクチョウ類の渡りの確認も行われている。しかし、日本の標識鳥は、広大なシベリアでは発見のチャンスも極めて低いし、道内に十カ所ある標識作業のための観測ステーションの活動も、もつと推進されてよいだろう。東南アジアでは、バンディングの態勢はまだ心もとないし、中国では一九八四年からやっと組織的標識付けに取りかかろうと、目下準備の段階である。

こうして得られた情報は、すみやかに公開されてはじめて意味をもち、同時にそれは、渡り鳥の保護とも結びつく。北海道では夏鳥の繁殖地、冬鳥の越冬地の保全がそれぞれ

十分に計られなければならない。さらに旅鳥には、アメリカの鳥類保護区設定のさいに配慮されているように、移動のルートに添ったところを指定、保護することが、効果的といえよう。

春に北へ帰るマガンの群れの中継地として、美唄の宮島沼を中心とする水田地帯は、重要な役をはたしている。しかし近年は、個体数が増加傾向をみせる反面、転作化のために、採餌場所を換える現象も起きている。それでもひとところに較べガンの数は回復しているし、個体群への狩猟圧も、日本では問題とならない。しかし、渡り鳥のなかには集団をつくりやすい移動時や越冬地での捕獲が、脅威となることもまだ多い。たとえば、北海道の草原を代表する夏鳥のシマアオジは中国ではかつて四害鳥のひとつとして、撲滅の対象にされたことがあるし、現在も越冬地のタイでは、年間四五、〇〇〇キログラムを輸出しているとして、ICBP(国際鳥類保護会議)から警告が出されている。

### おわりに

渡り(移動)という現象の基本的部分が、まだしっかり捉えられていない現状では、適確な保護施策の立案もまた難かしい。そしてこの基礎部分では、たとえば鳥の初・終認といった、誰にでも可能な観察が貴重である。こうしたことに多くの人が参加し、しかも、その情報を有効に集め解析する機構が、北海道でも望まれるところである。

(専修大学北海道短期大学教授)

- 注1 Thomson, A. L. ed. 1964 A new dictionary of birds
- 1 黒田長久 一九八二 鳥類生態学
  - 2 吉井 正・叶内拓哉 一九七九 わたり鳥
  - 3 日本鳥学会編 一九七四 日本鳥類目録 改訂第五版
  - 4 北海道自然保護課 一九七五 北海道鳥類目録
  - 5 日本野鳥の会 一九八二 日本の野鳥
  - 6 北海道 一九八一 野鳥生息環境実態調査報告書
  - 7 日本野鳥の会 一九七八 鳥類繁殖地図調査
  - 8 Yamashina, Y. 1961 Birds in Japan.
  - 9 北海道新聞社 一九八一 北海道大百科事典
  - 10